

別府大学人

国際経営学部における最近の国際交流の取り組み

－ 済州大学とスリランカ経済開発省との国際交流 －

中川 隆

Takashi NAKAGAWA

1. アジアの国々との地域に根差した国際交流事業

国際経営学部では、地域に根差した国際交流事業にも力を入れて取り組んでいます。別府が、源泉数(2,511孔)・湧出量(毎分87,576リットル)(2009年3月現在)ともに全国第一位を誇る温泉を有する国際観光都市であることは多言を要しません。統計では、この別府を訪問し宿泊する旅行者は年間370万人を超え(日帰り観光者は年間約780万人)、とりわけ中国・韓国をはじめとする東アジアからの旅行者が多いのが特徴です。温泉のみならず、海と山に囲まれた豊かな自然環境や地獄蒸し料理など食資源も旅行者を大いに惹きつける貴重な観光資源となっています。さらに、県北に目を移せば、日田の豊かな水資源などもアジアの旅行者にとって魅力的な観光資源となりうるはずです。

また、前大分県知事の平松守彦氏より提唱され、現在、県内の地域振興のみならず、途上国の開発支援方策としても大きく寄与している一村一品運動(One Village One Product movement; 以下、OVOP)も本県におけるアジアの国々との国際交流の核となっています。大分一村一品国際交流推進協会が窓口になって、OVOPに関わる国際交流事業が展開されており、国際経営学部もこれに深く関わっています。

以下では、上述の大分・別府の地域的な背景を踏まえたうえ、2012年1月及び同年2月に実施した2つの国際交流事業について報告します。

2. 済州大学との国際交流

2012年1月27日から30日にかけて、韓国の済州大学と共同で、「東アジアにおける水資源マネジメント」に関わる調査研究を実施しました(写真1)。共同調査を依頼してきたのは、私の大学院時代の同級生で留学生だった金慈景さんです。韓国の済州島では、ミネラルウォーター

需要の増大、ゴルフ場など観光開発などにより、水源枯渇や地盤崩壊、塩水侵入などのいわゆる水問題が顕在化・深刻化してきています。別府温泉や日田天領水などの水資源と関連した地域の事例分析を通じて、日本では共有資源としての水をどのように位置づけているかを検討し、済州島での水問題解決への示唆を得るため、本調査研究は実施されました。興味深かったのは、お招きした済州大学の6名の研究者が、歴史学や社会学、農業経済学など専門分野を異にする混成チームだったことです。学際的なアプローチで研究課題に取り組んでおり、学ぶところが多くありました。別府市や大分県、九州地方整備局などの行政機関で聞き取り調査を実施し(写真2)、日田天領水や阿蘇の白川水源などを視察しました。

水問題について全くの門外漢である私は、今回の共同調査研究を通じて、多くのことを学ぶことができました。温泉法など水に関わる法体系や条例、「水郷ひた」における河川行政の取り組みなどについて、新鮮な学びを得ました。

また、日田天領水の視察には、本学の学生2名が参加しました(写真3)。金さんの同時通訳ぶりなどを目の当たりにし、韓国語習得に向けて、いっそう動機づけられたようで、その点でも教育的効果は高かったように思います。

調査初日の晩に



写真1 別府湯けむり展望台で、済州大学の研究者と筆者(左から3番目)



写真2 別府市水道局で、聞き取り調査を実施



写真3 日田天領水の里 元氣の駅で

は、懇親会を開催し、国際経営学部の教員と懇親を深めて頂く場を設けました。「ぜひ、今度は済州島に来て下さい。」済州大学のプロジェクトリーダーの先生から、そのような歓迎の言葉を頂きました。

今回のプロジェクトを契機に、海外研修など様々な形で、済州大学との国際交流を深めていきたいと考えています。

3. スリランカ経済開発省の協力を得た海外調査

2012年2月上旬、スリランカ民主社会主義共和国を訪れました。途上国における食品残さ処理・リサイクルの実態を調査するためです。現地のガイドは、私のゼミの学生のペレーラ・ライガマゲ・ヌワン・ラクマル君（スリランカ人留学生）が担ってくれました。ゼミなどで、ラクマル君と食品残さの問題を議論する中で、途上国の実態を見てみたいという思いが強まったことが動機でした。

調査をコーディネートしてくれたのは、スリランカ経済開発省のジェニーさんとタランギさんです。彼女達と知り合ったのは、2011年7月にJICA研修員として、OVOPに関わる研修のため、本学に来学された時です。彼女達に加えてパキスタンやラオスなどから計10名の海外政府機関の女性職員をお招きしました(写真4)。我が国の農村経済に果たす女性の役割は大き



写真4 OVOP研修のため来学した女性達に囲まれて(2011年7月)

く、自国の農村女性エンパワーメント促進の視点から、我が国の農村女性による農産加工・開発などの取り組みの実態を学ぶための研修でした。本学での研修には、2名のゼミの留学生が議論に参加しました。中国人留学生の林燕さんにとっては、途上国の女性達との交流は初めてだったようで、大変刺激になったようです。

今回の調査が実現したのは、上記のOVOP研修で来日していた彼女達との交流の機会があったからです。コロンボ滞在2日目には、スリランカ経済開発省を訪れました(写真5)。



写真5 スリランカ経済開発省で

同日、National Cleaner Production Centre Sri Lankaを訪れ(写真6)、センター所長のペリス氏から食品残さの処理やマネジメントに関わる組織的な取り組みについて説明を受けました。物流技術が未発達であるスリランカでは、輸送過程で生鮮青果物が傷みやすく、食品残さ発生率が非常に高い実態にあることなど、非常に興味深い話を聞くことができました。

また、JICAスリランカ事務所も訪問しました。シニア・アドバイザーのブンチバンダ農学博士に対応して頂きました。同博士はびっくりするくらい日本語が堪能で、聞けば、九州大学の大学院で農業経済学を学び、博士号を取得した私の大先輩にあたる方でした。ここでも、人とのつながりの妙そして大切さを強く感じました。

スリランカの食品残さの調査でしたが、農村部を視察する機会にも恵まれ、非常に有意義な海外調査となりました。



写真6 National Cleaner Production Centreのスタッフと